

表現することで見つけた自分の居場所



大谷中学・高等学校を卒業した先輩たちが学生時代を振り返りながら、ここで得た気づきや現在の自分に息づくもの、未来へのヒントについて語るインタビュー企画。

第四回にご登場いただくのは、作家の原田まりるさん。京都本大賞を受賞した『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のこと教えてくれた。』や、哲学者の格言に触れる『まいにち哲学』など、哲学をテーマにした本を数多く出版し、マンガ原作者としても幅広く活躍する原田さんに、高校時代の葛藤や哲学書との出会い、現在の活動についてお話を伺いました。

思春期の孤独と哲学との出会い。

——原田さんは高校から大谷に入学されたそうですが、それ以前の幼少期はどんなお子さんでしたか？

原田まりる（以下、原田） かなりこだわりが強い子でした。離乳食も3歳までほとんど食べなかったみたいで、こだわりが強いというか率直というか、人間関係においても、小中学生の頃は苦労することが多かったですね。

——高校生になる頃には、その内面に変化はあったんでしょうか。

原田 いえ、実は高校に入った時期がいちばんの反抗期で、思春期が爆発していました（笑）。幼い頃から受験を続けてきたので、高校入学時に燃え尽きてしまって。親との関係もギクシャクして孤独を感じることも多く、センシティブな時期を過ごしていました。

——哲学書と出会ったのはその頃ですか？

原田 そうですね。当時スキー部に入っていたのですが、大谷高校は強豪でめちゃくちゃ厳しかったです。前年まで男子校だったので、その空気感もまだ残っていて、朝6時の掃除から一日が始まる厳しい日々でした。どんどん気持ちが追い込まれていくなかで、精神的な幸せを追うべきか、社会的な幸せを追うべきか、どちらの方が人生として正しいのか？ということの本気で悩んでいました。今考えると、中二病を引きずっていたのですが（笑）。そんな時期に、地元の本屋で哲学者の中島義道先生の本と出会って、衝撃を受けたんです。



原田さんにとって地元の京都は「思惟（しい）することに向いている街」。執筆した本にも京都の景色がたくさん描かれている。

——何が書いてあったんですか？

原田 当時の私は、どんな本を読めば今抱えている悩みが解決するのかが分からなかったんです。社会学や心理学の本を手にとったりもしましたが、どれもしっくりきませんでした。哲学というものの存在もよく理解できていなくて。でも、中島義道先生の本を読んだときに、「これに私の悩みが全部書いてある！」と感じました。先生の著書はとにかくパンチが効いているんです。文章もきれいごとではなく、とても率直で、そこにすごく感銘を受けました。

——特に心に残っている言葉というのは？

原田 確かパスカルを引用していたと思うのですが、「幸福すなわち気を紛らわすこと」という言葉です。その考え方は、例えば学校の授業や感動的な映画からはなかなか出会えないメッセージですよね。それがとても強烈でした。

本当の自分を認めてもらえる喜び。



「自分の世界を居心地よくするためには何が必要なのかを常に考え続けていたキルケゴールには、自分と近いものを感じます」（原田さん）

——「精神的な幸せを追うのか、社会的な幸せを追うのか」、その問いに答えは出たんですか？

原田 結論としては、「どちらも求めよう」ということでした。それでも自分の中での解離は感じていて、内側の自分と外側の自分、その間で揺れていたんだと思います。でも、学校の先生たちからはきっとそんな風には見えていなくて、当時の私は“ちょっと派手な子”というだけの印象だったと思います。

ある時、宗教の授業でエッセイを書いたら、佐々木先生に「君は普段こんなことを考えていたんだね」と驚かれたことがありました。それから、教育問題やジェンダー問題など、自分なりの考えを文章にして職員室に持って行くと、先生たちが集まってきて読んでくれるようになったんです。そんなやり取りが積み重なって、一時期、職員室が自分の居場所になりました。本来の自分を認めてもらえたような気がして、本当にうれしかったですね。

——それはすごく大きな出来事ですね。その後、大学では哲学のゼミを専攻されたそうですが、その頃にはすでに作家になることを思い描いていたんですか？

原田 いや、その頃はまだ具体的に「作家になろう」とは思っていなかったです。ただ、自分は会社員には向いていないだろうなどは、うすうす感じていました。自分の「こうしたい」が強すぎて、組織には馴染みにくそうだなと。だったら研究職の方が合っているかもしれないと考えたりもしましたが、それと同時に、文化人への憧れや本を出してみたいという思いもありました。

当時、大学に通いながら芸能活動もしていたのですが、「そっちの方が本を出したときに注目してもらえるんじゃない？」と、大学の先生に言われたんです。なるほど、そういう道もあるのか！と思って、その後も芸能方面の活動を続けることにしました。

——事務所に所属して、アイドル活動もされていたそうですね。

原田 “アイドル”といってもキラキラした衣装を着るようなものではなくて、男装をして活動していたので、女性のファンの方が多かったですね。その頃から執筆の仕事も少しずつやらせてもらっていたのですが、哲学に関する短いエッセイをSNSで発信したら出版社の人に声をかけてもらって、本を一冊出すことになったんです。その本をきっかけに、また別の出版社からも声をかけてもらって……という流れで、現在に至っています。

あらゆる創作を支える哲学的視点。



「暇な時間があまり得意じゃない」と話す原田さん。現在はエンタメコンテンツを中心に7作品を同時進行しているそう。

——まさかそんな経歴をお持ちだったとは驚きでした。その後、哲学をテーマにした本をいくつか出版されましたが、現在のお仕事についても教えていただけますか？

原田 実は、今は漫画作品を中心に執筆していて、特に力を入れているのがウェブトゥーン（韓国発祥のスマートフォンでの読書に最適化されたデジタルコミック）の原作です。また、アニメーションの原作も制作しています。まずは“その作品がどの媒体で映えるか”を考えることが好きですね。

——ジャンルがすごく幅広いですね。

原田 飽き性なので、そのとき興味を持ったものを集中してやりたい時期があるんですよ。ウェブトゥーンは韓国のエンタメの作り方がおもしろいなと思ったのがきっかけで、依頼されて書くこともあれば、自分が思いついたものを提案することもあります。以前はYouTuberの企画作家もやっていました。売れっ子YouTuberには企画作家がついていることが多いんですよ。

——いま書いているものやテーマは、必ずしも哲学に限定されていないんですね。

原田 そうですね。でも小説以外の作品にも哲学が関わってくることはあって、今の読者の多くはカタルシスを得たいという欲求がとても強いんです。例えば、「スカッとする」と一言で言っても、そこに悲しみを伴うものもあれば、怒りが残るものもある。そのニュアンスの違いを考える上で、哲学的な視点はとても役立っていると感じています。



<PROFILE>

原田まりる **Mariru Harada**

京都府生まれ。大谷高等学校を卒業後、芸能活動を経て2014年より作家として活動をスタート。現在はウェブトゥーンやアニメーション原作なども数多く手掛ける。著書に、京都本大賞を受賞した『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のこと教えてくれた。』（2016年ダイヤモンド社）、『まいにち哲学』（2017年ポプラ社）『ぴぷる』（2019年KADOKAWA）など。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Ayumi Yamamoto